九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Henry Thoreau's View and Vision of the Universe (In Honour of Professor Kazuto Ono and Professor Minoru Hirota On the Occasion of Their Retirement)

Ono Kazuto
Faculty of Language and Cultures, Kyushu University

https://doi.org/10.15017/1329401

出版情報：英語英文学論叢. 53, pp.1-19, 2003. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ヘンリー・ソローの宇宙意識

小　野　和　人

(I)

ソローはウオールデン湖畔に住んでいるときに、湖水と湖畔の森の自然に目を向けるとともに、はるかな大空や宇宙の方にも関心を寄せていた。作品*Walden*の中には、断片的ではあるが、空、天、宇宙への言及がよく見受けられる。たとえば、夜間湖にボートで乗り出し、魚釣りをするときに、ソローは宇宙へ思いを馳せることがあった。魚釣りをしながらも、彼の思いが、遠い天体の位置する広大な宇宙空間へとさまよい出て、「その宇宙進化論的な諸問題」('cosmogonal themes in other spheres' (175)[1]へと引きこまれてゆくのだった。'other spheres'とは即ちこの地球上をはるか離れた宇宙の領域を指している。ソローのこうした発想が具体的に何を意味したかは後で検討するとして、彼の抱いていた関心が仲々幅広く、直接の人生や回りの自然界にのみ限定されるものではなかったことが窺えるのである。そうした彼の発想や夢想も、釣り針にパウトタラ（ナマズの一種）がかかることによってしばし中断される。けれどもその獲物を手にしたとき、ソローは、ふと水中のみならず、空中でも魚釣りが可能であるかのような想いにかられた。

> 今度は釣り糸を水中に投げおろすばかりでなく、空中へ投げあげてもいいような気がした。水のほうがさほど密度が濃いというわけではないのだから。こうして私は、いわば一本の針で二匹の魚を釣ったのである。（原文175，翻訳では『森の生活』，下巻，11－12.）[2]

ソローがこうしてウオールデン湖の湖水に大空を連想した直接の理由は、

1）*Walden* のテクストは、ソローの作品全集*The Writings of Henry D. Thoreau*（Princeton : Princeton UP）のうちVol. II（1971）を用いた。

2）この部分の翻訳は、飯田 実訳（『岩波文庫』，1995）を用いた。なおその他の箇所で、私訳を用いた場合には訳者の表記はしていない。私訳では紙幅の都合で原文を要約した形にしている場合がある。

その透明度の高さにあった。「この湖水がもしごく小さくて、凝固したものであるならば、類まれな宝石としてどこかの皇帝の頭を飾っていただろう」（199）と述べ、この湖水を「空の水」（'Sky water'）とも呼んでいる。こうして湖水の透明度が高く、水面に空の雲を映しているのを眺めていると、ソローは自分があたかも空中にいるような錯覚をおぼえるのだった。ボートに乗っている自分が、まるで気球に乗って空中に浮かんでいるようで、水中の魚たちも彼の回りで空中遊泳をしているように感じられた。「魚の群はからだじゅうの鰭を帆のように張って、私の左右を少し低めに飛んでゆく密集した小鳥の群に似ていた」（原文189－190、飯田訳、下巻、35.）という。

ソローはこのような奇想を楽しんでいたのだが、それは奇想のみに留まるものではなかった。大空は大地と共に我々を取り巻く二大環境の一であるが、当然ながら大地のように直接触れるわけにはゆかない。けれども、触れられないが故にかえって深い憧憬の対象となってゆく。いわばソローは、透明な湖水を媒介として大空に触れようとしているのである。即ち、触れ得ないものへの好奇心があり、また触れ得ないがゆえにそれが神聖化されてゆくという状況があった。それ故に大空はソローにとって神秘であり、湖水を媒介として大空への接触をシュミレーションすることにより彼の人生が高められ、清められてゆくような期待があったのだった。

大空へのこうした想いをさらに拡大し、より深化させたものが宇宙への憧憬ということになるであろう。ソローは自然観察者たるにふさわしく、空の星々の名前にもなかなか詳しかった。ちなみにウオールデン湖畔にある彼の小屋が、人里離れていて、夜はいかに静寂であるかを強調する際に、それがあたかも遠い宇宙空間に位置しているように形容してみせる。

> 私が住んでいたのは、夜ごとに天文学者たちが観察する、たくさんの天の領域にも劣らず遠く離れた場所であった。われわれはとかく、たぐいまれな楽しい場所というものは、喧噪の巷から遠く離れた、太陽系のはるかかなたの、より天上的な一角に、たとえば「カシオペアの椅子」の背後にでもあると想像しがちである。私は自分の家が、ほんとうに宇宙のそうした片隅にあって、しかも永遠に新しくけがれを知らない場所であることを発見したのである。仮にプレイアデス星団とかヒアデス星団、アルデバラン星とか彦星の近くに住み着くことに価値があるとすれば、私はまさにそういう場所に住んでいた。つまり、そこは私が置き去

りにしてきた人間世界からは星団とおなじくらい遠くへだたっていたので、いちばん近い隣人の目にも、月のない夜でなければ見えないほど、かすかにまたたく小さな光にすぎなくなっていたのである。私が居座ったのは、大宇宙のそんな場所だった。(原文87－88, 飯田訳, 上巻, 158.)

ソローがこうして夜空の星々に心を通わせるシーンは、エマスンの「自然論」("Nature", I) の冒頭に述べられている星空への礼賛の言葉を連想させる。エマスンは夜空の星々の壮麗な美に感動し、「この光景が千年に一回であったなら、人類は代々これを奇跡として子孫に語り継いだことだろう」(7)[3] と言い、星々が神の存在を直感させる美の使節だと主張している。エマスンの発想では、夜空の星々は全く人の眺める客観的な対象物であり、その光景に感動するとしても、その中で人が行動する余地はない。これに対してソローは、遠い星々のある宇宙空間に自己の住まいを設定し、その中で自己が生きるという状況を想定しているのである。むろんそれは現実ではなく、想定にすぎないが、ソローとしては、ただ宇宙を見上げ、眺めるための客観的対象に留めおくことでは満足できなかった。場所がどこであれ、その中で自分が生き、行動する姿勢を示すことが彼の基本的な発想であった。透明なウオールデンの湖水を媒介にして大空に触れ、空中で魚釣りをしたり、気球で飛行したりする場面を想定することもそのような彼の行動的な姿勢の一環であった。

ウオールデン湖畔をかすめて疾走する蒸気機関車の描写にも、やはり宇宙への連想が見受けられる。むろんその機関車は、ソローの思索生活をさまたげる騒々しい厄介者ではあったが、そのダイナミックな動きには、なにか天体の動きを想起させるものがあった。ソローは、その何台もの車両を牽引する蒸気機関車の勇姿を最初惑星の運行になぞらえたが、それに納得できず、ついでそれを彗星の動きにたとえ直している。「その軌道は回帰曲線を描いてはいないようだし、あのような速度と方向からして、ふたたびこの太陽系に戻ってくるかどうかわからないのだから、むしろ彗星に似ているというべきかも知れない」(211) と。これは蒸気機関車の勢いをたいそう誇張した表

3) Ralph Waldo Emerson, "Nature I", *Works of Emerson* (Boston and NY : Houghton Mifflin, 1903) Vol. I. による。

現ではあるが、それでも実際にこの機関車は、ソローの郷土コンコードの村人たちの平穏で固定的であった従来の農本的な生活をかき乱し、あわただしい、流動的な商業経済中心の生活に変えてしまった。だから、それはまさに、太陽や太陽系の惑星たちの安定した軌道をおびやかす「宇宙の漂流者」である彗星になぞらえられることがふさわしかった。彗星の一見不規則な動きと軌道の謎は、近代科学としての天体力学によってすでに突き止められてはいたが、ソローとしては、それを単なる図式や数式の知識に留めておくことでは満足できなかった。それを何か身近に存在するものの動きになぞらえて「実感」してみたかった。たとえそれが、蒸気機関車の運行という代換えのイメージによるとしても、とにかくその実感（体感）を味わおうとしたのである。こうした実感追求の発想にソローの抱いた宇宙観ないし宇宙意識の特色の１つがあると言えよう。

彗星といえば、ソローのみならず、詩人ホイットマンも好んで作品に取り込んでいる。普通の惑星たちのとる安定し、整然とした軌道に比して、彗星の示す奔放でエクセントリックな動きは、自由を愛する詩人の気に入ったらしく、自らを彗星になぞらえてもいる。[4] しかし、ソローとしてはホイットマンほど自由気ままにはなり得なかった。ソローは自分の読者たちに対し、やはり人生を教える教師であり続けたかったのである。ちなみに蒸気機関車を運転する乗務員たちが、ウオールデン湖畔にいるソローの姿を見覚え、彼に挨拶をするようになったという。どうもソローはこの鉄道の従業員だと勘違いされたようだった。このエピソードを語りながら、ソローは、彼自身もやはり、ある意味で、どこかの鉄道の従業員なのだとみなしている。「私も地球の進む軌道のどこかで、保線の仕事をやりたいと思っているのだから」（“I too would fain be a track-repairer somewhere in the orbit of the earth.”）（115）というのである。これはむろん比喩的な言い方であって、その真意は、世の人々が、人生の軌道を踏み外さないように、真に生き甲斐のある人生を送れるように、支援したいという彼の強い願いの表明であった。けれども、ソローが提示するこの宇宙的なイメージを、比喩としてのみならず、文字どおりそのまま受けとめることも一興であろう。広大な宇宙空間の中を、太陽系の一員として、我らの地球が悠々と進んでゆく。ソロー自身もその保

4）Walt Whitman, “Song of Myself”, *Leaves of Grass*（NY and London : W.W. Norton, 1973）の第52節（p. 89）による。

線夫として、近くの宇宙空間にいて地球の進行をじっと見守っている。もしもその軌道に異常があれば、すぐに修復をするという構えでもって。やはりその宇宙軌道のイメージには彼自身の積極的な参加と行動の姿勢が反映されている。しかも、このことは、疾走する蒸気機関車の姿でイメージされたあの彗星の動きとも関わってくるはずである。というのも、もし彗星のとる不規則な動きと位置によって、地球の進行が撹乱される恐れが生じるとしても、ソロー自身は、その地球の軌道を自らしっかりと守ろうという構えを示しているからである。即ちソローにとっては、宇宙空間といえども、ある意味で彼が活動し、貢献できる場でなくてはならなかった。

(II)

ソロー（1817－'62）が生きたアメリカ・ルネッサンスの時代は、近代的な科学・技術の発展が真に開始された時期であった。天文学の分野も、望遠鏡の改良（18世紀後半）や写真術の発明（1837年）等を利用することによって種々の実績を挙げ、世人の注目を集めたのである。海王星とその衛星たちの発見はその顕著な一例であった。また月や太陽、恒星等の天体写真も次々と試みられるようになった。このような成果が、この時代の天文学の特色となった。そのことは、「望遠鏡の時代」（'The Era of the Telescope'）[5] というこの新たな科学・技術の開花時代の呼び名に集約されているといえよう。こうした天文学の躍進を一番すなおに喜んだ文人はエマスンであった。彼は、1832年のヨーロッパ旅行の途次、イタリアのフローレンスで天文学者アミチ教授を訪問し、天体観測用の機器を見学している。さらにその後も各種の天文学書をひもとき、郷土コンコードにおいては自ら天文学の入門的な講演を行なったほどであった。

ポーもＳＦ作品として、気球による月世界への旅の物語（「ハンス・プファールの無類の冒険」（"The Unparalleled Adventure of One Hans Pfaall", 1835））を書き、宇宙空間から見た地球の姿を自らの想像により生き生きと描写してみせた。[6] ホイットマンも新たな天文学の知識に強い関心を示し、

5）Robert Wilson, *Astronomy through the Ages* (London : Taylor & Francis, 1997) pp. 91－120.

6）小野 和人「アメリカ・ルネサンス期の文化・文学における宇宙意識：概観」、『英語英文学論叢』 第52集、2002年、pp. 42－45参照。

太陽系の惑星たちや他の恒星たちの動きをはじめ、各種の天体の現象や運動のことを彼の詩のなかに取り込んだ。[7] 自己の自由奔放な精神を、エクセントリックな動き方をする彗星になぞらえた詩などはその好例である。要するに、このアメリカ・ルネッサンス期の文人たちで、宇宙や天文学に関心を持った人々は、総じて好意的にこれを捉え、意欲的に自己の作品に反映させたのである。

ところがソローだけは例外であった。彼は宇宙を常に意識し、宇宙の現象に関心を示し、彼の作品の処々にそれを反映させているが、近代天文学の成果に対してはむしろ冷ややかであり、天文学者に対しても批判的であった。言うなれば、机上の学者による数式や図式という客観的な成果だけでは満足できなかった。彼が求めていたのは、単なる知識そのものではなく、その知識を自分がどのように活用するかであった。海王星の衛星トリトン発見の報に接しても、「人はそんな衛星の発見が出来ても、自分の目の中のちりは見出せないものだ」(*Walden*, 51) と揶揄している。天文学者については、さらに厳しい態度を示し、「天文学者は天文台のドームより遠くを見ようとはしない」(*The Moon*, 23)[8] などと言っている。天文学と天文学者に対するソローの不満は、彼の日誌の中にさらに色々な言い方でくり返されている。

> 我らの科学は、いくつか格好な話の種となってくれる。星々への距離や星々の大きさについての堂々たる解説によって。でも、その星々が人間にとってどのように関わるかについてはほとんど全く教えてくれない。人がいかにして国土を測量し、船を操縦すべきかは教えてくれるが、いかに人生の梶をとったらよいかは告げてくれない。(*The Moon*, 22)

> 天文学者は、意義のある現象について、あるいは現象というものの無意義さについて盲目だ。ちょうど鋸をひくとき、木くずから目を守るため塵よけ眼鏡をかけている木びき師のように。問題は何を見つめるかではなく、何を読みとるかなのだ。(22－23)

---

7) 同上、pp. 45－47参照。

8) Thoreau, *The Moon* (Boston and NY : Houghton Mifflin, 1985) による。なおこの作品は、ソロー自身が、自己の膨大な日誌 (*Journals*) の中から、夜の散策と思索を扱った部分を抜き出し、編集したものである。実際の出版は彼の没後であった。本論中、以下の3箇所の引用文も同書からのものである。

むしろ占星術の方がこれよりも高い真実の萌芽を含んでいた。ひょっとしたら星々は、天文学者よりも牛馬を引いてゆく連畜のチームの御者にとっての方がより意義深く、真の意味で天上的なのかも知れない。(23)

その表現に種々バリエーションはあるにせよ、ソローの言わんとすることは明らかである。即ち、それは、天文学による新知識や情報が、そのままでは人生の糧になりにくいということ、また天文学者が客観的な事実のみを追求し、人間の生き方には全く無関心であること等に集約されるであろう。それは自然科学というものの立場上やはりやむを得ないことであろう。とはいえソロー自身は、あくまでも世人に対する人生の教師であり続けようとした。人生についての意義を探るための新たなきっかけ、またその成果を人に伝達するための効果的な手がかりが得られない場合に、天文学と天文学者は、ソローにとって不満と焦燥を投げつける標的となったのである。けれども、注意すべきことは、ソローが実際には宇宙の現象や天体の姿に常に関心を寄せていたことである。第1章で述べたように、ウオールデン湖畔における自分の小屋の位置を、宇宙の星々や星座の中に想定するという発想にもそのことは明らかと言えよう。

それではここで、拙論の冒頭において言及したソローのエピソードのことに戻ってみよう。即ち彼が夜間にウオールデン湖で釣りをしていた場面である。釣りをしながらも、彼はふと現実を忘れて宇宙へと思いを馳せ、その「宇宙進化論的な諸問題」('cosmogonal themes') に引きこまれていったという。それは具体的に何だったのであろうか。一般に宇宙進化論といえば、この宇宙がいつ、いかにして発生し、かつ今の姿にまで発展してきたかを問うものであろう。'cosmo' が「宇宙」のことであるのは明白として、'gony' とは、辞書の教えるところによれば、'generation, production, or manner of coming into being of a thing'[9] である。即ち、「何物かの発生、生成、またそれがいかにして発生したか」ということになる。

この宇宙の誕生についての一般的な取り組みは、我々の太陽系がいかにし

---

9) *Webster's Third New International Dictionary* (1971) p. 971. なお学問の分野としての 'cosgomony' としては、'a part of the science of astronomy that deals with the origin and development of the universe and its components' となっている。p. 514参照。

て発生したのかという問いに始まった。それに関して、すでに18世紀後半に２つの論が提示されている。その１は、フランスの自然哲学者ビュッフォンの説（1745年）である。ビュッフォンによれば、彗星が原始の太陽に衝突し、その反動で太陽からいくつかの塊が飛び出し、惑星になったという。こうした惑星たちの太陽をめぐる動き（公転や自転）もこのときの衝撃により得られたというのである。この説に対し、10年後、哲学者カントが、さらにその数年後天文学者ラプラスが、星雲説をとなえた。星雲とは、原始の宇宙空間のなかでいくつも層をなしていたガスやちりの雲のことで、カントによれば、そうしたガスやちりの雲が回転を始め、平らな形になり、その中心部分が引力により周りの物質を集めて太陽となった、太陽から離れた他の部分も、同様にして引力の主に作用した箇所が惑星になったという。ラプラスの理論も基本的にはカントの説に重なるものであった。両者の相違は、主として、カントが原始星雲を冷たくて静止していたと考えたのに対し、ラプラスは、それがすでにはじめから高温で自転していたと見なした点である。太陽や惑星たちの示す角運動等の力学的な観点からすれば、ラプラスの発想の方がより自然であるらしい。とはいえそれは、星雲説という基本的な立場ではカントと共通であった。ソローが生きていた19世紀前半期においては、ビュッフォンの衝突説とカントーラプラスの星雲説は共存していたが、星雲説の方が主力となっていた。彗星と原始太陽の衝突ということは、理論的にはあり得ても、実際の可能性はきわめて薄いとみなされたのである。[10)]

それならば、ソローはやはり星雲説の方に加担していたのだろうか。実際にはそれは不明と言わねばならない。彼は「宇宙進化論的諸問題」に引き込まれたというのみで、その結果には触れていないからである。けれども、すでに指摘したように、ソローは、蒸気機関車の走行に彗星の動きを連想し、その撹乱による地球の軌道の乱れ（実際には世の人々の人生における軌道からの脱線）の可能性を懸念している。そのことと結びつけてみると、ビュッフォンのとなえた彗星と原始太陽の衝突説も結構ソローの関心を引いたかも知れない。とはいえ、宇宙進化論については、その正確な決定的な解答は得られないとしても、むしろその問いかけそのものに意義があるともいえるで

---

10) Walter Sullivan, *WE ARE NOT ALONE*（McGrow－Hill, 1966）の第５章参照。邦訳は、上田 彦二訳『われわれは孤独ではない：宇宙に知的生命を探る』（早川書房、昭和42年）pp. 45－54.

あろう。なぜなら、宇宙の始まりという根源的な、超越的な発想に向かうことにより、我々の意識が、決まりきった固定的な日常生活の枠を離れ、末梢的なことにこだわらなくなり、より自由自在になれるからである。ソローが宇宙論に関心を示したのも、こうした意識の変革と、それにより得られる人生上の収穫、即ち古い意識を捨て、新たな、より自由な人生への取り組みに向かう心の姿勢が得られたからだと考えられる。[11)]

夜中、ウオールデン湖上での釣りの最中で、ソローがふと宇宙進化論に思いを馳せている折りに、パウトタラが針にかかる。そのときソローが思い浮かべたのは、地上の水だけではなく、天空でも釣りができるのではないかという発想であった。釣り糸を天に向けて抛るということは、天空での収穫をめざすことになる。もし地上の水での獲物が、淡水魚のパウトタラという物質であるならば、天空でとれる獲物は、きっと精神の獲物、つまり新たな人生の糧となる獲物であろう。「私は、いわば一本の針で２匹の収穫を得た」（“Thus I caught two fishes as it were with one hook.”（175））とソローが言っているのは、以上のような物心両面にわたる獲物という意味からだと考えられる。

(III)

ところで、宇宙進化論に関わってくるもう一つの問いは、進化した今の宇宙が実際にはどのような姿をしているかということである。むろん近代天文学は、この問いについても取り組みを開始していた。このような問いかけに関連して、ソローは、『ウオールデン』の「結論部」（“Conclusion”）の章の冒頭で、イギリスの古典詩人ハビングトン（William Habington, 1605－’54）の詩の一部分を引用している。

「あなたの見る目を内に向けよ。
そうすれば、あなたの心の中に、
まだ発見されていない千もの地域が見つかるだろう。

11）このようなソローの心の姿勢については、*Studies in Henry David Thoreau*（六甲出版、1999）における拙著論文“‘A Living Way’ in Thoreau’s Poem “Old Marlborough Road””, pp. 65－74参照。

そこを旅せよ。そうして自己の宇宙誌の大家となれ」(320)[12]

この詩の趣旨は、むろん、自分の目を心の内部に向けて、自分自身についての探求をせよ、と促すものである。原詩も、それを引用したソロー自身の趣旨もその点に相違は見られない。けれども、「宇宙誌」('cosmography')という言葉そのものに注意してみるならば、それがソローにとって具体的にどのような意味を帯びていたのであろうか。ただしその前に、原詩の作者ハビングトン(エリザベス朝後期に生きた詩人)にしてみれば、cosmograghyとは「世界を地図のように描写すること」であったと思われる。世界とは、人間を取り巻く全環境としての天と地を併せて指すものであった。けれども、天についてはまだ知識がさほど得られなかったために、ほんの飾りの程度に留まり、結局実質的には「大地」の研究、つまりは図式的な地理学の謂いとなったのである。ところが19世紀にいたると、ドイツの地理学者フンボルト(Friedrich H. Alexander Humboldt, 1769－1859)やリッター(Carl Ritter, 1779－1859)たちにより、より科学的で体系の整った地理学が確立され、それが'geography'の呼び名で定着していった。[13] したがってcosmographyの方は、古典的で、時代遅れの呼称として見捨てられたのである。

けれども、逆にいえば、cosmographyは、地理学としての立場を捨て去ったために、もっぱら宇宙(cosmos)のみを扱う分野に専念できることになった。ソローはこのような新たな意味でこの言葉を把握したように考えられる。と言うのも、すでにみたように、19世紀前半は、近代的な自然科学の発展が真に開始され、天文学もその華やかな一環をなしたからである。

それならば、当時の天文学はこの宇宙をどのように把握していたのであろうか。すでに18世紀後半において、イギリスの天文学者ハーシェル(William Herschel, 1738－1822)は、鏡を用いた反射望遠鏡を作成し、天体観測の精度を飛躍的に高めたのだった。ハーシェルは、その望遠鏡を駆使して自ら宇宙全般の観察を行なった。その際に彼は、特に星々が集まって構成

---

12) ハビングトンの生涯と彼の詩については、拙著『ソローとライシーアム:アメリカ・ルネサンス期の講演文化』(開文社叢書 12, 1997年)の第4章 第3節(pp. 143－153)参照。

13) 水津 一朗『近代地理学の開拓者たち』(地人書房, 1994)の第1章「カ ール・リッター」(pp. 3－29)参照。

される星団と、その星団が集まって雲のように見える銀河系を観測し、いわば宇宙全体の星々についてのカタログ（一覧表）を作成したのだった。ハーシェルの息子ジョンも、フランス人ダゲールによって開発された写真術を天文学に取り込んだ人であり、父親の天体カタログ作成の研究を引き継いだのである。こうしてハーシェル父子によってはじめて具体的な宇宙の構造がイメージされたのだった。それによると、当時宇宙で明確にできた銀河系（星々の大集団）はただ一つ、我々の太陽系が所属する銀河系のみであり、しかも我々の恒星である太陽は、この銀河系の中心に位置すると見なしたのである。[14)]

このことは、今日でいう宇宙像とは決定的に異なっている。なぜなら、今日では、このような銀河系の存在は、全宇宙でただ一つどころか無数といってよいほどあり、しかも、我らの太陽は、そうした無数の銀河系の一つの中で、その中心部どころか全く周辺の腕の部分に位置しているという。銀河系の中心部はブラック・ホールであり、何物の生存も許されない死の世界ということである。また無数というべき銀河系のいずれもが、いわば宇宙という名のシャボン玉の表面に浮かんでいる泡粒のごとくで、お互いの位置は相対的であり、いずれも宇宙の中心部とは見なせない由である。[15)]

これに対して19世紀前半のソローの時代においては、宇宙の中での我々の位置づけはまさに中心そのものであった。なにしろ、宇宙全体で我々の銀河系が、目にすることのできる唯一の銀河系であり、その中で我々の太陽系がそのまた中心に位置していると見なしたからである。これはまさに中心の中心とでもいうべき発想であろう。古代、中世においては、我々の太陽系の範囲内で、地球を中心と見なす天動説が盛んであったわけだが、19世紀前半期においては、全宇宙というレヴェルにおいて、我々の存在が中心なのだと発想したのである。いわば宇宙全体という規模において天道説が唱えられたようなものであった。このことは、ハーシェルの用いた反射望遠鏡の精度が高かったために、我々の銀河系についての観測がより明確となり、それが極端にクローズ・アップされたためであろう。したがって、それとは対照的に宇

---

14) 桜井 邦朋『天文学史』（朝倉書店, 1990）の第７章「恒星から星雲へ」（pp. 98－105）参照。

15) 同書の第８章「20世紀の天文学（I）」（pp. 164－170）参照。平凡社版『天文の事典』（1987年）「銀河」の項目（pp.186－203）参照。

宙の他の領域がすっかりかすんでしまい、全体としての宇宙像が矮小化し、偏ってしまったのである。

このような自己中心的な宇宙観や宇宙像は、必然的に当時の文人・文化人たちの心に深い影響を及ぼしたことであろう。エマスンは、宇宙の中心に「大霊」を位置づけ、その大霊が、人間を含めてあらゆる森羅万象の存在の源なのだと見なした。メルヴィルは、エイハブ船長の執念を通して、白鯨という宇宙全体を表す象徴物に打ちかかった。メルヴィルにとっては、人間一個人対全宇宙という壮大きわまる対立の図式が可能であったのだ。ホーソーンの主人公ヘスターもまたそれにひけをとらない巨大な存在である。植民地時代の小さな町ボストンにいながら、彼女の持つ罪と罰と購いの意味の大きさにおいて、またその善悪を全て包含する自己中心の生き方の壮大さにおいて、彼女はやはり宇宙的な存在だったと見なせるであろう。ホイットマンにいたっては、自分という存在が「一つの宇宙」(“Walt Whitman, a kosmos”)だとうたっている。[16] それも、彼のみが巨大と言うのではない、民衆の１人１人をひとつの宇宙だとみなすのである。要するに、当時の天文学が提示したように、我々の太陽系と我々人間の存在が、全宇宙の全く中心に位置するというのであれば、当然そこにいる個々の人間たちは、ささやかな一小市民ではなく、それどころか、思いきり壮大な、宇宙的なスケールの英雄になれたわけである。

ソローの場合も状況は同じようであった。彼は自分の住むウオールデン湖畔をやはり彼なりの宇宙の中心と見なしていたようだ。そこでは、彼の意識が、何らわずらわしい世事に妨げられることはなく、自由自在に発揮され、彼という存在が、真の生き甲斐を求めて思いきり模索し、いわば限りなく飛躍し、成長できる場だという意味で、ひとつの宇宙の中心点であった。以上のような状況の中で、ソローは、自己の心身のこの上もない充実感を次のように述べている。

> 永遠の時間や永遠の真理は、ほかではなく、今まさにここにある。神自身が、今、この瞬間、栄光の頂点に達している。(97)

この表現は「永遠」という時間的観点からなされているが、もしこれを空

---

16) Whitman, “Song of Myself” の第24節 (p. 52) による。

間的な発想に置き換えてみるならば、今ソローのいるウオールデンの場は、まさに宇宙の中心だといえるであろう。なぜなら、「神がその栄光の頂点に達する」（“God himself culminates”）というのは、言い換えれば、「栄光の頂点にいる神」を実感できる人間も、やはりその「頂点」に神と共にいることになるであろうから。さらに、エマスン流に言い直すならば、まさに「大霊」の占める神聖そのものの場に、その大霊と最も密接につながる人間自身が位置しているということになるであろうから。また、すでに示唆したように、人間が宇宙の中心にいるということは、その人間が宇宙そのものの存在であるとも言い得よう。むろん客観的にみれば、あるものの中心部分はイコールそのものの全体ではあり得ない。中心部はやはり全体の一部分にすぎない。ところが、人間の精神の面からすると、その精神が何かの中心の位置を占めるということは、結局その精神がそのものの全体を占めるということになるはずである。というのも、その中心部は、全体の意義を濃密に煮詰めたエッセンスであり、全体の内容を実質的に代表しているからである。その場合には、ものごとの中心部分がイコール全体だという等式がほぼ成り立ち得るであろう。

ソローが、『ウオールデン』の“Conclusion”の章で、あの英詩人ハビングトンの詩を引用したことに戻って見ると、そこにはやはり、自己という人間の存在が宇宙そのものだという発想がうかがえる。「自己自身を探究し、自己の宇宙誌を描く大家となれ」というのだからである。そしてこのような趣旨には、まさに自己中心の発想が強調されているのである。さらにまた言い添えれば、およそアメリカ文学の全貌においてソローほど自己中心の作家・文人はいなかったといってよいであろう。『ウオールデン』の冒頭部におけるあの有名な自己表現の宣言が、如実にそれを物語っている。

> たいがいの書物では「私」という第一人称は抜きにされている。ところがこの本では、それがあくまでも維持される。自我に関するその点が、他のものと大いに異なっているのである。(3)

このような自己意識を抱き、思いのままに自己を表現をするということが、即ち「「自己（自家製）の宇宙誌」（‘Home Cosmography’）を描く」ということになるであろう。その場合、自己は卑小ではなく、やはり壮大であらねばならない。そうでなければ「自己誌」が「宇宙誌」とはなれない。ホイッ

トマンのいうごとく、自己は「ひとつの宇宙」でなければならない。当時の天文学の発想に戻していえば、やはり全宇宙の中心に自己という人間の存在が位置していなければならないのである。

ただし注意すべきことは、ソローの主張には、自己というものに絶対性を置くとともに、他者に対して、一種の相対性も共存させているということである。それは、自己の人生に限りない価値を置くとともに、他者の人生にもそのような価値を期待するということである。人生を教える教師たるソローは、読者たちに十全な自己充足、自己実現を呼びかけているのである。ホイットマンのうたったごとく、自己イコール宇宙であると共に、民衆の１人１人がそれぞれ宇宙であるべきなのである。言い換えれば、ソローの読者たち個人個人にとって、いま各自がいる場所が全宇宙の中心だといえることになる。各自が真の人生について悟りを開き、真の充実感を持って生きているならばである。このように、自己の絶対性が、同時に、他者に対しての相対性を併存させるというところにソローの宇宙観のいまひとつの特色があるといえよう。

(IV)

こうしてソローは、ウオールデン湖畔を彼なりの宇宙の中心と見定め、彼自身の心の成長を目指したのである。しかし、宇宙の中心にいるということは、そこに静止し、安住していることではない。そこからの絶えざる成長がそこにいる条件となってくるのである。ソローは、自己の精神のこのような成長の状況をやはり宇宙的なイメージで表現している。

ただし、その前に、彼はまず『ウオールデン』の“Conclusion”の章において、当時一般にさかんになっていった世界一周の旅や世界の僻地・極地への探検のブームに言及し、そうした試みに参加した探検家たちを列挙している。その数例を取り出してみよう。

1．イギリスの探検家で、アメリカ大陸をまわる北西航路を探検したが、北極圏で遭難したフランクリン（Sir John Franklin, 1776－1848）
2．スコットランドの探検家で、アフリカのニジェール川流域を探険したマンゴー・パーク（Mungo Park, 1771 ― 1806）
3．アメリカの探険家たちで、共に北米東北部を探険したルイスとク

ラーク（Meriwether Lewis, 1774 ー 1809, William Clark, 1770－1838）

4．アメリカの探検家、ウイルクス（Charles Wilkes, 1798－1877）の指揮のもとで南極大陸への接近を目指した南洋探険隊の航海（1839－'42）

5．自ら世界周航をし、その旅行記 The Races of Man（1851）を著したピッカリング（Charles Pickering）等々。（以上は、pp. 321－322.）

以上、いずれの探険や旅もソローの目から見れば、払った手数や犠牲がずいぶん大きく、その割に収穫の乏しいものであったということで、否定的な評価をされている。特にピッカリングは、その書中で、アフリカ東部の島ザンジバルにおける猫の数を表記したが、そのことをソローはことさらに取り上げ、それが世界一周の成果としてはあまりにも乏しいものだと揶揄している。

ソローの真意は、すでに掲げたハビングトンの詩の引用に示されていたように、「自己自身の探険」の勧めにあった。自己こそが唯一やり甲斐のある探険の場だと力説するのである。その場合ソローは、実際に行われた世界探検の行為の規模の大きさに負けないために、さらに大がかりな探険のイメージを何か示す必要があった。この世界より規模の大きい場といえば、やはり宇宙の場ということになってくる。こうして彼は、宇宙への探険という発想とイメージを用いて自己探険の状況を次のように表現している。

> いまこそ、西の最果てをめざして旅立とうではないか。その道はミシシッピー川や太平洋にぶつかってもとまらず、かといって老朽化したシナ、もしくは日本に通じているわけでもなく、この地球と接線をなして進み、夏も冬も、昼も夜も、日が沈み月が落ちたあとも、ついには地球が沈んだあとも進み続けるのだ。（322, 飯田 実訳, 下巻, 273.）

ここには、むろん新大陸開発のために、アメリカ人たちが行なってきた種々の旅と探険の歴史が集約的に言及されている。その１つは、そもそもアメリカ大陸発見以前からやっていた西方航路を求める旅、即ちヨーロッパからインドへ向かうための新航路“A Passage to India”を模索する旅であった。いま１つは、アメリカ大陸を発見し、その大陸の東岸に定着後、大陸を西へ西へと探険し、その領土を勝ち取っていった旅。しかもそれがアメリカ人の

運命であるとされた旅、“Manifest Destiny”のスローガンに明示されている旅であった。しかるにソローは、英国詩人ハビングトンの提唱した「自己探究の旅」の趣旨を継承し、それにさらに新たな、積極的な意義を付与し、その規模の拡大を図るために、アメリカ人の行なった新大陸の発見と横断の旅の軌跡を象徴的に用いたのである。

けれども、ソローが示そうとする新たな旅は、アメリカ大陸を横断した後、さらに太平洋に入り、アジアを目指すものではなかった。むしろ、その地点から急上昇し、宇宙空間へと突入してゆくものであった。その際に、この旅人は「地球と接線をなして進む」(“....leads on direct a tangent to this sphere” (322))のだという。この表現には、実際に測量士であったソロー自身の実感・体感がこめられている。ソローの時代には、むろん宇宙旅行という発想そのものが荒唐無稽であったはずである。それでも、やはりソローは、自分なりの実感を持ってそれを表現しようとしているのである。そしてこの「実感」ということは、すでにくり返し我々が、ソローの空・天・宇宙における発想にその具体例をみてきたものであった。

ところで、ソローがハビングトンを継承して説く「自己探究・自己発見」の旅とは、言い換えれば、自己が新たなより良い人生へと目覚めること、より生き甲斐のある人生への取り組みを開始することの謂いではなかろうか。そのためには、自己が日常生活における常識の殻を破り、新たな未踏の心の領域へと進入してゆかなければならない。つまり心の解脱がぜひ必要となってくる。その解脱が、「宇宙空間への突入」という発想で表現されている訳である。つまり我々の精神が、地球の表面という常識的な領域をはい進んでいるだけでは駄目で、そこからの思い切った飛躍・飛翔が不可欠だということである。またその際に、その飛躍と宇宙への突入のイメージをより実感のあるものにするために、ソローは測量に関係した言葉‘tangent’(接線)を用いたのであろう。この心の解脱の旅は、いわば、太陽系の中を進み、ひいては太陽系を去っていくほどの大がかりな宇宙旅行となってゆく。「日が沈み、月が落ち、ひいては地球が沈んでゆく」という形容がそれを示唆しているようである。これはやはり、人が実際に宇宙旅行を行なっていて、宇宙船の窓から遠ざかってゆく日月や地球の姿を眺めているような実感のある描写だといえよう。

ソローは作品*Walden*の最後の部分において、彼のウオールデン生活の成果を総括するための言葉を述べている。それは彼の心の解脱を夜明けのイ

メージで表し、それを実際の日の出による夜明けのイメージと比較したものである。即ち、彼にとっては、心の夜明けの方がはるかに重要であり、それに比べれば、物理的現象としての太陽は、「夜明けの明星にすぎない」（“The sun is but a morning star.”（333））というのである。この表現は、先ほどの宇宙旅行でイメージされた自己探究の旅、心の解脱の旅とつながっているのではなかろうか。なぜなら、この表現においては、太陽の見かけの大きさの減少ということが示唆されているからである。即ち、宇宙旅行者が、太陽系の中を旅するとして、太陽から次第に遠ざかっていくならば、太陽の円盤としての見かけは小さくなり、さらに太陽系の外にでた場合には、太陽はついに全く点としての存在になってしまうからである。無数の輝く恒星の１つとなって。もっと正確にいえば、すでに太陽系の中でさえも、土星と天王星との間の位置で、太陽の見かけは、一点の星と化してしまう。[17] そうなれば、太陽の見かけは、せいぜいのところ、「夜明けの明星」の程度となってしまうのである。

ところで、ここにいう「明星」とは、太陽系内のものであれば「金星」のことであり、太陽系外とすれば、単に「明るく輝く一恒星」ということになる。ソローがどちらを指して言っているのか定かではない。けれども、いずれにせよ、その見かけが、太陽のように円盤（円球）としての幅を持ち得ず、単に「輝く一点としての星」の姿になってしまったということに変わりはない。そうであれば、この宇宙旅行者は、宇宙空間を遠く旅して、太陽が単なる一つの星として見えるほどの地点に到達したということになる。この宇宙旅行とはむろん比喩であり、ソローの真意では「自己探究」、「自己の人生の探究」、即ち「自己の心の解放・解脱」のプロセスを意味するものであった。そのプロセスとは、「日月が沈み、地球が消え去ってしまう」ほどのはるかな距離を進み、ふり返ってみれば、太陽が一点の星と化すほどの地点にまで至るものであった。言い換えれば、それほどまでに壮大な規模において、心の解放と解脱を目指していくべきだということであろう。

こうして「心の夜明け」は、物理的な太陽による夜明けに比較され、その規模と存在価値において相手に大差をつけてしまった。とはいえ、この比較により、物理的現象としての太陽は、必ずしも全く貶められてしまったわけ

17）拙論“The Sun As a morning Star : A Study of the Closing Words of *Walden*”,『ヘンリー・ソロー研究論集』第27号（2001年）p. 4 参照。

ではない。なぜなら、それは円盤としての幅を失ったにしても、「夜明けの明星」としての光の美しさは失っていないからである。夜明けの空に燦然と輝く明星のイメージはやはりすばらしい。矮小化して権威を減じたかに見えるとしても、太陽はやはりその輝きによって、人間の「心の解脱」を祝福しているように感じられるのである。こうしてソローは、この「心の収穫」に二重の栄光を与えているようにみえる。1つは、それを遠距離からみた太陽の、減少した見かけの姿と比較することによって。いま1つは、矮小化し、一点の星と化した太陽の、それでもやはり美しい輝きのイメージを添え、人間の心の勝利（解脱）を照らし出すことによってである。[18)]

(V)

以上のようにソローは、読者に向けて「心の解脱」への呼びかけを行うために、その比喩表現として、当時としては画期的であった宇宙空間への旅のイメージを用いたのである。これに対して現代人は、比喩でなく実際の宇宙旅行に成功しつつある。それなのに現代人は、ソローが提唱し、期待したような「自己探究」による心の充足や心の解脱にはまだ至っていないようである。あたかも現代の人々は、実際の宇宙旅行という物理的な収穫を得るために、19世紀前半のソローの時代には期待できたはずの「心の収穫」を手放してしまったかにみえる。それに現代においては、宇宙は、人間がその中心部に位置する栄光の場ではなくなった。我々は、無数の銀河系の中の一つに、それもその周辺部に位置しているのみである。従ってアイザック・アシモフ（Isaac Asimov, 1920－'92）に言わせれば、我々地球人は、宇宙の中心人物どころか、「宇宙の孤児」にすぎない。それも核戦争による人類滅亡の危機におびえながら、我々の先輩としての宇宙人の存在をむなしく探し求めている孤児だというのである。そしてその宇宙人とは、人類よりも先に原子核反応の秘密を発見し、その核の脅威をなんとか克服して、平和共存の可能性を確立し得たかもしれない者たち、宇宙のどこかにいるはずの優れた先駆者としての知性体のことである。もしもこうした先例が宇宙の中に見出せるならば、人類にとっても、それを模範として踏襲しうる可能性がでてくるという訳である。[19)]

18）同上、pp. 10－11. 参照。

ともあれ我々人類は、実際に月に到着できたし、現在は地球周辺の宇宙空間内に宇宙ステーションを建設中である。もしなんとか核戦争を回避できるならば、いずれは月に基地を建設し、さらにそこから火星への到着を目指すことであろう。そして火星のひどく厳しい自然環境をなんとか改良できたならば、人類はそこに第２の地球を出現させ得るかも知れない。アシモフは、さらにその後の人類の旅についても可能性を模索している。[20] 即ち人類は、火星からまた出発し、火星と木星との間に位置する小惑星帯へ至るであろうという。その小惑星のいくつかに着陸し、その内部を掘削して居住空間をこしらえる。それによって、小惑星の中を何重にも層をなして居住したならば、その立体的な利用法により、今日の地球人口の全てが一つの小惑星中に収容できる由である。いずれはさらに、その小惑星にロケット・エンジンを取り付けて、その小惑星ごと人類は太陽系を去り、隣の太陽であるアルファ・ケンタウリ等を目指すだろうという。こうして人類ははるかに遠い大宇宙の旅に出かけることになる。

それはソローが『ウオールデン』の結末部で示した「心の旅」のイメージを実際に物理的に実現させたようなものだといえよう。しかしながら、心の解放という精神の旅を物理的な現実の宇宙の旅に置き換えることによって、人類の心ははたして満たされ得るものであろうか。大きな疑問だと言わざるをえない。けれどもアシモフの主張によれば、このような宇宙旅行の場合、人類は、旅と定住という二つの相反する条件を同時に満たすことになるのである。というのも、人類は、小惑星の中に住んだまま、そのままの状態で、小惑星に動力を取り付け、果てしない宇宙旅行に出発できるからである。このように、旅と定住という本来矛盾するはずの両要素を理論上調和させ、結合させたことは、やはりアシモフの手柄とすべきであろう。旅も定住も、共に人類の希求するものであることは言うまでもない。このような旅イコール定住という新方式が、人類の心にある種の余裕を与え、ソローの説くような新たな生き甲斐を呼び起こしてくれるであろうか。また宇宙のオデッセイとしての果てしない旅が、人類の知的好奇心を次々と満たし、永遠への想いをさらに高めてくれることであろうか。

---

19) Isaac Asimov, *Frontiers* (London : Mandarin, 1991) pp.299－302, 及び *The Danger of Intelligence and other Science Essays* (Boston : Houghton Mifflin, 1988) の第３章参照。

20) Asimov, *Is Anything There?* (NY : Doubleday, 1968) の第５章参照。邦訳は、山高昭訳『生命と非生命のあいだ』(早川書房、昭和44年) pp.265－268.